

臨床現場との対話に基づくホスピス・緩和ケアの哲学の構築

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2019-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹之内, 裕文 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10297/00026474 |

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01991

研究課題名(和文) 臨床現場との対話に基づくホスピス・緩和ケアの哲学の構築

研究課題名(英文) Reconstructing Philosophy of Hospice Palliative Care, through Dialogues with Clinical Professionals.

研究代表者

竹之内 裕文 (Takenouchi, Hirobumi)

静岡大学・農学部・教授

研究者番号：90374876

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：一方で、近代ホスピスケアの先駆者の論著を読み解き、また他方で、国内外のホスピス・緩和ケア専門職と対話することで、本研究はホスピス・緩和ケアの実践を支える理念について検討した。それを通して、ホスピス運動、ホスピス・緩和ケア、トータルペインとスピリチュアルケア、QOLとウェルビーイング、自然な死、食べること、ホームケア、コミュニティ、死と死ぬこと、死にゆく者のケア、希望という基礎概念が浮かび上がった。これらの概念をめぐる対話的探究の成果を別掲の研究業績にまとめることで、ホスピス・緩和ケアに哲学的土台を提供することに寄与した。

研究成果の概要(英文)：This research examined the basic ideas supporting hospice palliative care practices in the manner of carefully interpreting the texts written by and about the pioneers of hospice palliative movement, as well as engaging in dialogues with hospice palliative care practitioners. This led to the following eleven basic conceptions; such as “hospice movement”, “hospice palliative care”, “total pain” and “spiritual care”, “quality of life” and “well-being”, “natural death”, “eating”, “home care”, “community”, “death” and “dying”, “care for the dying”, and “hope”. Publishing the research findings in the journals and books noted elsewhere, this research contributed to strengthen the philosophical foundation of hospice palliative care.

研究分野：哲学 倫理学 死生学

キーワード：ホスピス運動 緩和ケア スピリチュアルケア QOL well-being 食べること ホームケア good death

1. 研究開始当初の背景

19世紀半ばのアイランドで、M.エイケンヘッドの手によって蒔かれたホスピス運動の種子は、英国のC.ソンドースによって育てられた。カナダでは、同じ種子が「緩和ケア palliative care」として成長した。そして今や世界中で、ホスピス・緩和ケアは豊かな実りをみせている。

しかし、初期のホスピス運動を主導した宗教的理念は、ホスピス・緩和ケアの確立と普及とともに、後退ないし変容を余儀なくされ、それとともにホスピス・緩和ケアの分野では、ケア理念の変質とそれに基づく混乱が生じている。なかでもホスピス・緩和ケアにおいて重要な位置を占める「スピリチュアルケア」と「よき死 good death」については、広範な合意が得られるどころか、その系統的な分析 (systematic analysis) さえ確立されていない現状にある。

そもそも「ホスピスケア」と「緩和ケア」について、統一的定義が確立されておらず、それに応じて両者の異同も明確にされていない——なるほど「緩和ケア」に関してはWHOの定義が存在するが、これに対してEAPC (European Association for Palliative Care) のタスクフォースが異論を提起している。

以上の通り、問題が「理念」や「定義」にかかわるかぎり、哲学はケア実践の土台となる基礎的諸概念を吟味し、これらを再定義するという仕方で、混乱した状況を打開するために固有な寄与を果たすことができるだろう。とりわけホスピス・緩和ケアの足場がケアが提供される場所や制度にではなく、むしろ「各個人への積極的なトータルケアを現実化するケアの哲学」に求められるならば、哲学が寄与する可能性はさらに高くなる。

研究代表者は2011年4月から12年4月まで、スウェーデンのBorås 大学健康科学部で在外研究 (客員教授) に従事し、広く欧州のホス

ピス・緩和ケア分野の専門職・研究者と学術交流する機会を得た。そこで直面したのがホスピスケアの「世俗化 secularisation」と「医療化 medicalisation」という問題である。

世俗化とともに、初期のホスピス運動を特徴づけた宗教的要素が失われ、医療制度への組み込みが進行するなか、欧州のホスピス・緩和ケア専門職は、なにを思想的な拠り所に、終末期ケアの実践に従事しているのか。このような問題関心から、科学研究費助成事業研究 (基盤B) 「世俗化する欧州社会における看取りの思想的な拠り所の究明」 (研究代表者・竹之内裕文 2012年 - 14年) に取り組んだ。

研究代表者はスウェーデン滞在以来、欧州の医療社会学者たちと友誼を結び、ホスピス・緩和ケアの理念的な変質と混乱について意見交換を重ねてきた。なかでもDavid Clark (University of Glasgow) は、EAPC Atlas of Palliative Care in Europe 2013の共著者として、欧州におけるホスピス・緩和ケアの最新情報を研究代表者に惜しみなく提供し、またC.ソンドース書簡集の編者として、近代ホスピスの開拓者であるC.ソンドースその人の実践と思想が孕むいくつかの分岐点——ホスピス・緩和ケアの変質と深いかかわりをもつ——に研究代表者の眼を開かせてくれた。

およそ以上の研究活動を通して地歩を固めることで、研究代表者は本研究課題に到達した。

2. 研究の目的

一方で、M.エイケンヘッドやC.ソンドースら近代ホスピスケアの先駆者たちの論著を丹念に読み解き、また他方で、ホスピス・緩和ケアの近年の動向を踏まえつつ、国内外のホスピス・緩和ケア専門職と対話することを通して、ホスピス・緩和ケアの理念と基礎概念を再定義すること、それを通して「ホスピス・

緩和ケアの哲学」の構築に寄与すること、それが本研究の目的である。

3. 研究の方法

前述の研究目的を遂げるためには、ホスピス・緩和ケアに関する専門的知見はもとより、ホスピス・緩和ケアの歴史・社会・宗教的背景を十分に踏まえる必要がある。そこで本研究では、ホスピス・緩和ケアの専門職・研究者と社会科学系研究者の協力を得て、1)ホスピス・緩和ケアの開拓者たちのテキスト解釈を進めるとともに、これを補完すべく、2)ホスピス・緩和ケアの発祥の地を訪ね、研究協力者(国外)の助力を得て、関係者にインタビューを実施する。3)これと並行して、各年度3回程度の研究会を開き、臨床現場との継続的な対話を試みる。そのうえで4)ホスピス・緩和ケアの最新の動向を確認しながら、シンポジウムや講演等の機会を利用して、研究成果を広く社会に還元し、最終的に5)研究成果をとりまとめた著書を公刊する。

本研究チームは、研究代表者のほか、計6名の研究分担者と2名の海外研究協力者により組織される(研究開始時)。

研究分担者のうち2名は緩和ケア医である。そのうち森田達也は、国内外の緩和ケアの実情(実践と理論)に広く精通している。在宅緩和医の河原正典からは、home careに関する固有な洞察が期待される。

研究分担者のうち2名は看護師・看護研究者である。そのうち坂井さゆりは、欧州における緩和ケアの動向に詳しく、学際的討議と現地調査について、有益な助言を与えてくれるだろう。齊藤美恵には、哲学(現象学)と看護(実践・理論)を結ぶ役割が期待される。

2名の研究分担者は社会学者である。田代志門と諸岡了介の両名は、ホスピス・緩和ケア分野での研究蓄積がある社会学者として、各々異なった問題関心と研究背景から、ホスピス・緩和ケアの展開とその社会的・宗教的背景について専門的知見を供与する。

研究協力者(国外)としてはDavid Clark (University of Glasgow)と岩本喜久子 (Surrey Memorial Hospital Consultation Team & Laurel Place Hospice)が参画する。欧州を代表する医療社会学者であるDavid Clarkからは、欧州におけるホスピス・緩和ケアの発展を中心に、研究の全般にわたって、適宜、アドバイスを得る。岩本喜久子は、MSWおよびBritish Columbia州(カナダ)の認定ソーシャルワーカーとして、病院、ホスピス、地域社会などで広く活躍している。適切な文献と海外調査先の選定に際して、両研究協力者(海外)の助言が大きな意味をもつだろう。

注記：齊藤美恵と河原正典は研究期間途中に研究分担者の資格を喪失したため、研究協力者(国内)として研究に参画した。また研究期間中に、藤本穰彦が研究分担者として加わった。

4. 研究成果

ホスピス・緩和ケアの成立に関する一連の研究書(David Clark, *To Comfort Always*, Oxford University Press, 2016など)を丁寧に読み進め、また国内外のホスピス関連施設でフィールドワークを実施した。それを通してホスピス運動(hospice movement)、ホスピス・緩和ケア(hospice palliative care)、トータルペイン(total pain)とスピリチュアルケア(spiritual care)、QOL(quality-of-life)とウェルビーイング(well-being)、自然な死(natural death)、食べること(eating)、ホームケア(home care)、コミュニティ(communitiy)、死と死ぬこと(death and dying)、死にゆく者のケア(caring for the dying)、希望(hope)という基礎概念が獲得された。これらの基礎概念をめぐる対話的探究を計8回の定例研究会で実施するとともに、2回の特別研究集会を開催した。それらの研究成果は、別掲の著書、論文、招待講演、学会発表(5.

主な発表論文等)で公表した。

11の基礎概念すべてについて、ここで研究成果を報告するわけにはいかない。そこで一例として、ここではホームケアに関する研究成果を紹介しておく。

『北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす』(大阪大学出版会、2018年)第4章では、在宅ケア(home care)をとり巻く現状を確認したうえで、次のような根本的な問いを提起した。在宅(home)とはどのような場を言うのか。また在宅(home)で提供されるケアは、いかなる意味で望ましいといえるのか。

これらの問いとともに、研究代表者は在宅(home)とケアの連関、さらに住む(dwelling)という人間の営みについて探究するという課題に導かれた。よい生(well-being)の実現という目標を見据えつつ、この探究を進めることで、今後の社会で求められる在宅ケア(home care)のあり方が浮き彫りにされるだろう。

こうした展望のもと、まず在宅(home)ケアの現状を概観し、その哲学的基礎を築くという課題を確認した。次いで、スウェーデンにおける脱施設化の試みに題材を求め、ホームを拠点に、地域社会で生活することの意味について考察した。そのうえで、ケアとの連関において「ホーム」の意味を考察し、そこから「住む」という営みとそれを支える人間の基本的な存在様式を浮かび上がらせた。最後に、これらを踏まえて、ホームケアの可能性と今後の方向性について展望した。

「ホーム」とは、生存のための基礎的ニーズが充足されるだけでなく、大切な人たち(家族や友人)と共にあり、同時に、自分なりの生活が尊重される場所、それゆえ安らぎが感じられる場所を指す。これらの条件を満たすとき、ある場所は「ホーム」となる。

土地は、住む(dwelling)という人間の基礎的な営みの文字通りの「土台」として、ホ

ームに存立基盤を与える。また同時に、土地との連関は私たちのアイデンティティ、とりわけ場所に基づくアイデンティティ(place-based identity)と深く関係する。

ネル・ノディングズが指摘するように、ホームは、避難場所(shelter)や食べ物だけでなく、人がそこから、またそこで、アイデンティティを請求する場所を提供する。ホームには、自分の所有する物や愛着のある事物を蓄えておく場所があるからであり、個人のニーズに応える人びと、同時にその個人に対して、自分たちのニーズに応えることを要求する人びとが存在するからである。

ホームは、私たちのアイデンティティ形成において不可欠な役割を担っている。私たちはホームにおいて(at home)人びと、動物、植物、事物、考え方などを世話・手入れする(care for)ことを学ぶ(あるいは学び損ねる)からである。応答の習性(habit of response)は、ホームで学ばれ、そこで出会われる動物、植物、事物に向けられる。

その意味で私たちの人生(life)は、文字通り「ホームから始まるstarting at home」といってよい。ホームは、人間的な生を営むために不可欠な拠点である。特定の場所に定住し続けるか、住み処を転じるかにかかわらず、私たちが人間であること/になることに関して、ホームは存在論的な意義を有している。

私たちは生きる拠り所(home)を必要とし、それを得ることで人間的な生を営む。ドイツの哲学者ハイデガーの「世界内存在In-der-Welt-sein」という概念と対比的に表現すれば、私たちは「拠り所に身を落ち着ける存在being-at-home」なのである。

最後に、研究代表者の論文(“Dwelling in the world with others as mortal beings: “well-being” in post-disaster Japanese society”. Kathleen Galvin (ed.) Routledge International Handbook of Wellbeing)が印刷中であること、また研究代表者がホスピ

ス・緩和ケアの哲学的基礎にかかわる単著を執筆中であることを申し添えておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 19 件)

- (1) 諸岡了介、相澤出、田代志門、藤本稯彦、板倉有紀、終末期に生じる一時的な覚醒・寛解とその意味 在宅ホスピス遺族調査から、死生学・応用倫理研究、査読有、第 23 号、2018、75-96
- (2) 諸岡了介、死と「迷惑」：現代日本における死生観の実情、宗教と社会、査読有、第 23 巻、2017、79-94
- (3) 藤本稯彦、田代志門、自宅での療養はなぜ中断されたのか：「みやぎ方式」の在宅緩和ケアを利用した在宅ホスピス遺族調査から、島根大学社会福祉論集、査読無、第 6 号、2017、33-34
- (4) H.M.R.K.G.NANDASENA, Sayuri Sakai, Tikayo Koyama, Analysis of characteristics related to the attitudes of Nursing Students toward terminal care: A comparative study between Sri Lanka and Japan, Journal of Health Science of Niigata University, 査読有、Vol.14, No.1, 2017, 35-41
- (5) 近文香、坂井さゆり、神経難病緩和ケアの文献にみる看護の課題、新潟大学保健学雑誌、査読有、Vol.14(1)、2017、1-8
- (6) 浅野暁俊、坂井さゆり、文献の統合より見出されたがん患者の看取りケアに対して新卒看護師が抱く困難感、新潟大学保健学雑誌、査読有、Vol.14, No.1、2017、79-85
- (7) Harue Masaki, Nobuko Kawai, Keiko Matsumoto, Miyoko Kuwata, Sachiko Yoshioka, Midori Nishiyama, Ryoko Uchino, Hiroko Nagae, Megumi Teshima, Sayuri Sakai, Kazuko Endo, Consensus development of quality indicators for end-of-life care in elders, International Journal of Nursing Practice, 査読有、23(S1), 2017, 1-27
- (8) Matsumoto K, Masaki H, Kawai N, Kuwata M, Yoshioka S, Nishiyama M, Sakai S, Endo K, Uchino R, Hayashi Y, Teshima M, Nagae H, Review on the Elements Related to the Development of End of Life Care Quality Evaluation Index

that Enriches the Final Years of the Elderly, Journal of Nursing & Patient Care, 査読有、2(2), 2017, 1-7

(9) Morita T, Kawahara M, Nationwide Japanese Survey About Deathbed Visions: "My Deceased Mother Took Me to Heaven", J Pain Symptom Manage, 査読無、Vol.52, No.5, 2016, 646-654.e5. DOI:10.1016

(10) Morita T, Oyama Y, Cheng SY, Koh SJ, Kim HS, Chiu TY, Hwang SJ, Shirado A, Tsuneto S, Palliative Care Physicians' Attitudes Toward Patient Autonomy and a Good Death in East Asian Countries, Journal of Pain and Symptom Management, 査読有、Vol.50 No.2, 2015, 190-0.e1 DOI:10.1016/j.jpainsymman.2015.02.020. Epub 2015 Mar 28.

(11) Hamano J, Morita T, Kawahara M, et al., Validation of the Simplified Palliative Index Using a Single Item From the Communication Capacity Scale, Journal of pain and symptom management, 査読無、Vol.50 No.4, 2015, 542-7.e4 DOI:10.1016/j.jpainsymman.2015.04.021

(12) 竹之内裕文、限界づけられた生を受け継ぐ 生きること、出会うこと、カトリック研究所論集、査読無、第 20 巻、2015、68 - 120

(13) 竹之内裕文、これからの在宅ケアを考える～北欧ケアの思想的基盤を手がかりにして、保健医療社会学論集、査読有、26 巻、2015、62

〔学会発表〕(計 31 件)

- (1) 竹之内裕文、いのちに与る、生を受け継ぐ、仏教文化講座(招待講演) 2018
- (2) 金子奈未、坂井さゆり、近文香、浅野暁俊、村松芳幸、宮坂道夫、小山千加代、野口美貴、佐野由衣、老年期にあるがんサバイバーの語りにもみる高齢者のスピリチュアリティ、第 22 回日本緩和医療学会学術大会、2017
- (3) 坂井さゆり、魅力的なエンド・オブ・ライフ・ケア研修を考えよう！(招待講演) 第 22 回日本緩和医療学会学術大会、2017
- (4) 竹之内裕文、これからの日本の終末期ケアヨーロッパのホスピスから展望する、静岡いのちの電話講演会(招待講演) 2017
- (5) 竹之内裕文、生命の終焉を考える 2～「自然な死」ってなんだろう～、東京農業大学(招待講演) 2016
- (6) 河原正典、シームレスな緩和ケアを目指して、第 13 回日本乳癌学会東北地方会(招待講演) 2016
- (7) 河原正典、在宅緩和ケアの現場から、ご家族のためのがん患者さんとご家族をつなぐ在宅療養ガイド研修会 in 沖縄 2016(招待講演) 2016

(8)河原正典、在宅緩和ケアの現場から、地域におけるがん患者の緩和ケアと療養支援情報普及と活用プロジェクト がん医療フォーラム 仙台 2015 (招待講演) 2015

(9)竹之内裕文、対話を通して生と死を探求する、市民大学リレー講座 死を見つめ今を生きる ~豊かな人生を送るヒント~ (招待講演) 2015

(10)Hirobumi Takenouchi, Where does Environmental Crisis Lead Us? Toward Construction of Environmental Bioethics, 4th International Conference on Management and Economics(招待講演) 国際学会) 2015

(11)竹之内裕文、限界づけられた生を受け継ぐ 生きること、出会うこと、仙台白百合女子大学 カトリック研究所主催 2015 年度第1回研究会 (招待講演) 2015

〔図書〕(計 8 件)

(1)竹之内裕文 (共著) 大阪大学出版会、北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす、2018、93 - 111

(2)坂井さゆり、森田達也、河正子、田村恵子、前滝栄子、市原香織、福田かおり、草島悦子 (共著)、青海社、看護に活かす! スピリチュアルケアの手引き (第2版)、2017、147

(3)竹之内裕文 (共編著)、ポラーノ出版、喪失とともに生きる—対話する死生学、2016、7-16,281-300

(4)竹之内裕文 (共著) 静岡大学公開講座ブックレット 9、静岡大学・読売新聞連続市民講座 2015 年度<生きる>を考える、2016、79-106

(5)田代志門、世界思想社、死にゆく過程を生きる 終末期がん患者の経験の社会学 2016、272

6. 研究組織

(1)研究代表者

竹之内 裕文 (TAKENOUCHI, Hirobumi)
静岡大学・農学部・教授
研究者番号: 9 0 3 7 4 8 7 6

(2)研究分担者

森田 達也 (MORITA, Tatsuya)
聖隷クリストファー大学・看護学研究科・臨床教授
研究者番号: 7 0 5 1 3 0 0 0

坂井さゆり (SAKAI, Sayuri)
新潟大学・医歯学系・准教授
研究者番号: 4 0 4 3 6 7 7 0

田代 志門 (TASHIRO, Shimon)
国立研究開発法人国立がん研究センター・社会と健康研究センター・室長
研究者番号: 5 0 5 4 8 5 5 0

諸岡 了介 (MOROOKA, Ryousuke)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号: 9 0 4 6 6 5 1 6

藤本 穰彦 (FUJIMOTO, Tokihiko)
静岡大学・農学部・准教授
研究者番号: 9 0 5 5 5 7 5

河原 正典 (KAWAHARA, Masanori)
医療法人社団爽秋会岡部医院研究所・診療・医師
研究者番号: 7 0 7 1 1 3 7 3

齊藤 美恵 (SAITO, Mie)
西武文理大学・看護学部・講師
研究者番号: 8 0 6 4 8 1 1 3

(3)研究協力者

David Clark (CLARK, David)
University of Glasgow

岩本 喜久子 (IWAMOTO, Kikuko)
Surrey Memorial Hospital Consultation Team & Laurel Place Hospice